

第75回

(令和7年度)

“社会を明るくする運動”

作文・ポスターコンテスト

高岡市小・中学校児童生徒入賞作品集

社会を明るくする運動高岡市推進委員会

ご挨拶

第七十五回「社会を明るくする運動」

作文・ポスター作品集の刊行にあたって

社会を明るくする運動高岡市推進委員会委員長

高岡市長 出町 譲

このたび、第七十五回「社会を明るくする運動」作文・ポスター作品コンテストの表彰作品を決定しました。受賞された児童・生徒の皆さんには、心からお祝いを申し上げます。

「社会を明るくする運動」は、全ての国民が、犯罪や非行の防止と、罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい地域社会を築こうとする全国的な運動です。このコンテストは本運動の一環として実施され、作品集の刊行は今回で十三回目となりました。

学校関係者の皆様方には、作品の応募に協力していただきましたことに、深く感謝申し上げます。

児童・生徒の皆さんには、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことを基に、犯罪や非行のない明るい地域社会づくりに向けて、自分は何ができるのかについて考えたことや感じたことを作品にしてくださいました。また、相手を思いやり、助け合いながら明るい社会を目指す姿などを彩り豊かに表現していただきました。いずれの作品もとても素晴らしいものであり、大変感動いたしました。

このコンテストを通じて、次世代を担う児童・生徒の皆さんには、犯罪や非行といった問題について深く考え、是非、今後の人生において、社会を明るくすることに大きく貢献されますことを願っております。

また、本冊子は表彰作品を集めて刊行いたしました。多くの方にご覧いただき、児童・生徒の皆さんの思いや本運動の趣旨にご賛同をいただきますことを期待しております。

令和七年十二月

目次

【作文の部】

〈最優秀賞〉

地域とつながる私	野村小学校 六年 大浦 深結	1
----------	----------------	---

〈第75回 社会を明るくする運動 富山県推進委員会 最優秀賞〉

その一言がくれたもの	戸出 中学校 二年 来栖 風	2
------------	----------------	---

〈第75回 社会を明るくする運動 富山県推進委員会 最優秀賞〉

お母さんの病気が教えてくれたこと	南条 小学校 六年 福島 咲耶	5
------------------	-----------------	---

〈第75回 社会を明るくする運動 富山県推進委員会 優秀賞〉

大好きな町	牧野 中学校 一年 内山 夢花	7
-------	-----------------	---

〈第75回 社会を明るくする運動 富山県推進委員会 優秀賞〉

【ポスターの部】

〈最優秀賞〉

優しさは、人を少し強くする	南条 小学校 六年 吉田 悠真	29
---------------	-----------------	----

一人じゃないよ みんないるから大丈夫	戸出 中学校 一年 桶川 夏希	29
--------------------	-----------------	----

〈優秀賞〉

えがおのわ	南条 小学校 一年 磯辺 咲歩	30
一歩ずつ明るい未来へ	野村 小学校 六年 浅島 沙耶	30
ひとりじゃない つながるころ	野村 小学校 六年 中村 蒼真	30
やさしい心は みんなのえがお	能町 小学校 四年 四津川 莉唯	30
明るい社会をつなごう!!	南条 小学校 四年 春多 彩葉	31
十人十色 偏見のない世の中へ!!	野村 小学校 六年 川除 獅恩	31
守ろう 相手を想う明るい心	南条 小学校 六年 寺井 惟叶	31
立ち止まり 共に考える明るい社会	戸出 中学校 一年 中川 紗那	32
社会につながる 小さな優しさ	志貴野 中学校 一年 田畑 瑠衣	32
その一声 あなたの勇気が誰かを救う	志貴野 中学校 三年 小川 千穂	32
心つないで 明るい社会	志貴野 中学校 一年 松嶋 天音	32

いじめのない明るい学校
やさしさの輪
社会を明るくするための取り組み
いじめの無い安心できる学校を作るには
みんなで助け合って
理解してあげることが
小さな社会から踏み出す一歩

中田小学校 四年 宮島 羽多
能町小学校 四年 金井 優翔
太田小学校 六年 鞍田 未優
博労小学校 六年 酒井 守梨
福岡小学校 六年 宮崎 未怜
牧野小学校 六年 釣谷 柚稀
高陵小学校 六年 小幡 一都
18 17 16 13 12 10 9

助け合いの一步
言葉の重みに気付いた日
祖父と少年
矢印を自分に向けたことで見えた世界
声をかけ合うことで見えてくるもの

福岡中学校 一年 吹留 誉花
高岡西部中学校 一年 福田 昊隼
高陵中学校 一年 小倉 一晃
五位中学校 三年 中保 潤哉
志貴野中学校 三年 武田 穂乃華
27 25 24 22 20

作文の部



〈最優秀賞〉

地域とつながる私

野村小学校 六年 大浦 深結

私は、社会を明るくする運動について、高岡市のホームページで調べました。そこには、「社会を明るくする運動」犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラは、すべての国民が、犯罪や非行の防止と、罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場においてチカラを合わせ、犯罪のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。」と書いてありました。私も、犯罪のない地域社会を築くためにできることをしたいと強く思いました。なぜなら私は、とても怖い経験をしたことがあるからです。

一昨年、私と妹が家で留守番をしていたときです。学校から帰ってきて、私が洗面所にいたとき、知らない男の人

が突然、勝手口のドアを開けました。私はとても驚いたけれど、

「誰ですか。」

と勇気を出して言いました。すると、その男の人は何も言わずにドアを閉めて行ってしまいました。それは空き巣でした。私はすぐに、妹を連れて近くの家の人に助けを求めました。近所の人たちは、

「怖かったね。家の人が来るまで一緒にいるよ。」

と言って、家の人が帰って来るまで一緒にいてくれました。中には、元警察官だったおじさんもおられて、辺りを見回ってくださいました。そのおかげで、安心して待つことができました。勝手口の前に柵が置いてあったので、空き巣に家の中に入られることはありませんでしたが、本当に怖かったです。犯人が捕まって、警察の人も見回りの回数を増やしてくれていたけれど、私はしばらくの間とても怖くて、その時のことを思い出したくありませんでした。

でも、この社会を明るくする運動についての説明を読んだとき、自分の経験を生かして「犯罪のない地域社会を築

く」ために、自分にできることを考えることはできないかなと思いました。そして、私たちのことを助けてくれた近所の人たちの顔が思い浮かびました。

家族の他にも、自分のことを守ってくれる人が近くにいるということは、本当に心強いです。近くに住んでいる人がいつも見守ってくれていると思うと、登下校中も安心することができました。だから、自分の地域に住んでいる人とながつて、地域の人たちのことをもっと知りたいなと思いました。できるだけ地域の行事には参加するようにしたり、毎朝あいさつをして身近にいる人に自分の存在を知ってもらったりして、見守ってくれる人を増やすことも、犯罪と出合わないために大切なことだと思いました。

犯罪と聞くと、自分とは関係がないことだと思っていたましたが、犯罪の被害にあうことは誰にでも起き得ることだと知りました。その一方で、自分を見守ってくれている人や何かあった時に助けてくれる人もたくさんいるということにも気付きました。あいさつや地域の行事への参加を通して、地域に住む人たちとのつながりをつくることです、

犯罪のない地域社会をつくるために、私にできることだと思うので、実践していきたいです。

その一言がくれたもの

戸出中学校 二年 來 栖 風

私が「社会を明るくする運動」について初めて意識したのは、ある何気ない朝の出来事がきっかけでした。

中学一年の四月。私は新しい制服に身を包み、不安な気持ちで学校へ向かっていました。小学校のときに仲のよかった友達とクラスが離れ、クラスにうまくなじめるかどうか、そればかりが気になっていました。その朝、玄関で立っていた一人の先輩が、につこりと笑って「おはよう」と声をかけてくれました。知らない人から突然あいさつされ

て、びっくりした私は、戸惑いながらも小さな声で「おはようございます」と返しました。たったそれだけのことで、

でも、その一言が心に残りました。なんだか、ほんの少し気持ち明るくなつて、教室に入るときの足どりも少しだけ軽くなっていました。今思えば、あれも「社会を明るくする運動」の一つだったのかもしれない。大きなイベントじゃなくても、たった一言のあいさつが、人の心を救うことがある。私はそれを体験を通して知りました。

後日、先生がホームルームで「社会を明るくする運動」について話してくれました。「犯罪や非行をなくし、みんなが安心して暮らせる社会を作るための全国的な運動」だと。そのとき、私は「それってすぐ大人っぽい話なんじゃないのかな」と思いました。「私たち中学生にできることなんてあるのかな」とも思いました。でも、あの時の先輩の「おはよう」を思い出したとき、「私を感じた安心も、この運動につながっているのかもしれない」と気づいたのです。社会を明るくするって、特別なことをするんじゃないくて、「誰かの気持ちに寄りそうこと」「一人で悩んでいる人を見逃

さないこと」、そういう日常の中の小さな行動が積み重なっていくことなんだと思いました。

私はそれから、自分にもできることを探すようになりました。まず変えたのは、あいさつ。前はちょっと恥ずかしくて、言われたら返すだけだったけれど、今では自分から先に言うようにしています。「おはよう」と声をかけると、相手もびっくりしながら「おはよう」と返してくれることがあります。それだけで、空気がふわっとあたたかくなるのを感じます。

また、クラスで一人にいる子に話しかけてみたり、困っている友達に声をかけたりするようになりました。自分でも、ちょっと変わったなと思っていました。人を助けたり、支えたりするのに、大きな力はいらない。少しだけ気にかけて、ちょっとだけ勇気を出す。それだけでも、だれかの心が明るくなるんだと知りました。

最近、私には少し気になる1年生の子がいます。休み時間一人で読書をしていて、教室では静か。前の私に似ているなと思います。だから、少しずつ話しかけてみようと思

思いました。「それ、面白い?」「私もその本好きだったよ」そんな一言だけでも、声をかけ続けました。すると、ある日その子がこつと笑顔で「おはようございます」と言ってくれました。そのとき私は、あの春の朝、先輩に声をかけられたときの自分を思い出しました。そして気づきました。今度は、私が背中を押す側になる番だって。社会を明るくするって、きつとこういうことなんだと思いました。つながった言葉が、今度は自分から誰かへとつながっていく。そして、また次の誰かが、優しさを広げていく。

「社会を明るくする」と聞くと、警察やボランティアの人、大人たちが頑張ることのように思っていました。でも、私たち中学生にもできることがある。いや、むしろ中学校だからこそ、できることがあると感じます。たとえば、学校の中でささいなケンカを止めたり、SNSで悪口を見かけたときに流されないで注意したり。自分が正しいと思うことを、ちゃんと行動に移す。それはとても勇気のいることだけど、大切なことです。私もまだ、すぐに正しい行動ができるわけではありません。でも、「こうありたい」と思う

お母さんの病気が教えてくれたこと

南条小学校 六年 福島 咲耶

三月のある日、私はお母さんに話があると言われた。お母さんは、

「お母さん、乳がんになったんだ。」

と言った。私はおどろき過ぎて声が出なかった。そして、泣いてしまった。お母さんは死なない?お母さんの入院中、私はどうなってしまうの?と私は不安で頭がいっぱいになった。おそろおそろ、私はお母さんにその不安を打ち明けた。お母さんは私の背中をやさしくさすりながら、「大丈夫。お母さんは入院して手術をすれば元気になるよ。入院中は、咲耶の事は咲耶が大好きなお婆の直ちゃんにたのんであるから、心配しなくてもいいよ。」

と話してくれた。それを聞いた私は、心配な気持ちの一方でほんの少しだけうれしくなった。とてもつらい状況のお

心を持ち続けたい。そして、だれかの心を明るくする言葉や行動を、これからも少しずつ重ねていきたいと思います。

私は、あのときの先輩の「おはよう」で救われました。そして今、私も誰かにとつての「おはよう」になっているかもしれない。社会を明るくする運動は、特別な人だけのものではありません。一人一人が自分の場所で、できることをすること。それが一番大切なんだと思います。これからも私は、あいさつを大事にして、人の気持ちに気づける人になりたいと思います。そして、まわりの人を助け合いながら、小さな優しさを少しずつ広げていきたいと思います。たった一言の「おはよう」から始まった気づき。その言葉が、これからも誰かの心を照らす光になってほしいと思います。

母さんなのに、私が困らないようにさみしくないようにと色々と考えてくれていたなんて。私は改めてお母さんを尊敬した。それからは毎日少しずつ乳がんのこと、手術後の生活のことなどをお母さんが私に説明してくれた。私は、退院後はお手伝いを頑張ろうと心にちかった。

そしてむかえた入院の日。その日から私は直ちゃんの家で過ごした。直ちゃんたちは私にいつもと変わらない生活をさせてくれた。いよいよお母さんの手術の日がやってきた。私は授業中も気が気でなかった。学校が終わり直ちゃんの家に行くと、お母さんの手術の付きそいをしていたお婆あちゃんが無事に手術が終わったと知らせしてくれた。その言葉を聞いた私は安心してその場に座りこんでしまった。手術の次の日は私の誕生日だった。お母さんと過ごせない誕生日はさみしかった。その日の夜、直ちゃんの家で夕食を食べていると、宅配が来た。直ちゃんは手に箱を持っていて、それを私に渡した。箱を開けてみると、中には花束とネックレスが入っていた。直ちゃんが、

「お母さんからの誕生日プレゼントだよ。」

と教えてくれた。私はうれしくて泣きそうになった。食後にはおいしそうなケーキが運ばれてきた。プレゼントもこのケーキもお母さんが入院前から準備してくれていたのだと直ちゃんが教えてくれた。お母さんが私に喜んでもらおうと色々なことをしてくれていたことが、何よりもの誕生日プレゼントだと思った。お母さんのサブライズのおかげで忘れられない最高の誕生日になった。お母さんの入院中は何度も病院におみまいに行った。お母さんはどんな元氣になっけいき、予定より早く退院の日がやってきた。お母さんの元氣そうな顔を見て本当にうれしくなった。

今、お母さんは元氣になっけまた楽しそうに仕事に行っている。お母さんには高額りよう養費制度や傷病手当などの制度があることを教わった。その制度のおかげで、金銭的な負担が少なくて安心して手術が受けられたとお母さんは話していた。また、退院後はいくつかある職場のうち、家の近くの職場にかえてもらったり、身体に負担の少ない仕事にしてもらったり、病院を受診しやすい環境を整えてもらっている。病氣になっけも働けること、安心して治り

ようを受けることができることはとても素晴らしいことだと、楽しそうに働くお母さんを見て実感している。お母さんが病氣になっけからは、テレビなどで放送される医りよう関係のニュースにも興味を持つて見るようになった。今まで他人事だと思っけいたことが、こんなに身近に関係してくることに改めてびっくりしている。しかし、それ以上に、自分のこととして考えられる良い機会を与えてもらったとも思っけいる。お母さんが、家族だけではなく、お友達や職場の人達に協力してもらい、やさしさや思いやりをもっけ接してもらっけいるところを何度も見っけいる。その時はお母さんだけではなく、みんなが笑顔だ。自分と関係ない人であっけても、その人は誰かの大切な人に違いない。自分や自分の大切な人のことだけではなく、他人のことも大切に思っけ気持ちをみんなが持つことができれば、社会が明るくなっけいくのではないかと思っけた。私も人や社会を明るくすることができ、そんな人間になりたいと思っけう。

大好きな町

牧野中学校 一年 内山夢花

春、桜が咲きほこる頃、お囃子と太鼓の勇ましい音が、町に鳴り響く。それを聞くと、胸が高鳴り、心が舞い踊る。地元では、お祭りのことを「まつっん」という。私は、「まつっん」が大好きだ。

私のお祭り好きは、母の影響だ。私は赤ん坊の頃から、いろいろなところのお祭りに連れていかれた。私が泣くと、ティッシュの空き箱に画用紙を貼っけ作っけ獅子頭を持たっけて、母がお囃子を吹いてくれた。(母は、祭りでお囃子を担当している。)すると、私はご機嫌になり、手作りの獅子頭を元氣よく振り回して、ニコニコの笑顔で踊っけいたらしい。どこに行くときも、手作り獅子頭を手放さず旅のお供だっけたそうだ。

母の夢は、自分の子供と一緒に「まつっん」をすること。

私は、母の夢実現のための英才教育(?)のルールに、まんまと乗せられてしまっけたようだ。

私は、三歳から「キリコ」を始めた。キリコとは、花笠をかぶっけた子供のことで、獅子をあやす役を演じる。初めて着物を着せてもらっけた日に撮っけた写真がある。少し恥ずかしそうな笑顔で母と並んで写っけている。小さな私は、小学校のお兄ちゃんたちに交じっけて練習を頑張っけた。町の人たちは、「こんなに小さいがに、よう一丁前に踊れとる。たしいしたもんやわ。」と褒めてくださっけた。あのとき練習をやり通せたのは、母がそっけと隣にいてくれたからだ。キリコの舞の中には、田畑を耕す所作や稲刈りの所作がある。五穀豊穣を願う人々の願いが込められている。小さかった頃は分からなかつけたが、大きくなるにつれて祭りの深い意味も理解できるようになっけていっけた。

この春、私は中学生になっけた。キリコができるのは、小学生まで。三歳から九年間務めたキリコを卒業する時がきた。今年から「サンバサ」に挑戦する。サンバサは男性が務めることが慣例である。私の「まつっん」に対する想い

は、他の誰にも負けない。だから、サンバサをやりたいのだ。

でも、女が私することに対して、町の人はどう思うだろう。他の町内から冷やかな目で見られるかもしれない。こんな大事な役を任せて大丈夫なのかと、私の町が批判されるかもしれない。私は、とても不安だった。町の人たちは、「夢花なら大丈夫。」と言ってくださった。性別や年齢など関係なく、公平な目で私を見てもらっていると感じて、言葉にできないくらいうれしかった。サンバサの踊りは、想像以上に足と腰にくる。私を信頼してくれた町の人たちの期待に応えるため、自分の誇りのため、毎日、必死に練習に励んだ。

私の住む町は、四十件ほどの小さな町だ。お年寄りが多く、空き家も多い。町のシンボルとなる大きな橋がありベンチがついている。大人も子供もベンチに腰を下ろし、憩いの場になっている。私はこの場所が大好きだ。座っていると、知らない人も笑顔で、「こんにちは。気持ちがいいね。」と声をかけてくださる。周辺には、川に沿って桜の並木が

ある。季節ごとの花が植えられた花壇もある。桜の花びらが散って、水面に浮かび、ゆらゆらと流れていく様子はとても美しい。花壇には、チューリップなどの花が季節を彩る。町の人たちが、水やりをしたり草むしりをしたりする光景をよく見る。自分の町を愛する想いが伝わり、心が温まる。

私は、この町に誇りをもっている。優しい町の人々。「まっつん」に対する熱い想い、お年寄りも若い人も子供も、みんな支え合っている。私は、この町に育てられ成長してきた。これからも、そうだろう。この町には、犯罪や非行など世間を騒がせているような問題は起こらないと思う。私は、この町のよさを受け継ぎ、次の世代に伝えていきたい。きれいな町並み、「まっつん」の伝承、温かい心。人と人をつなぐ赤い橋には、今日もたくさんの人たちが笑顔で言葉を交わし行き交う。私はこの町が大好きだ。

〈優秀賞〉

いじめのない明るい学校

中田小学校 四年 宮島 羽多

わたしは、『いじめのない明るい学校』はあったらいいなと思うけどすぐに作るのはいじけないと思います。なぜかというと、人の思いは人それぞれがうからです。とらえ方、感じ方がちがうと、自分はいやじゃないと思っていても、相手はいやだなと思うこともあると思いました。逆に相手はいやじゃないと思っていても、自分はいやだなと思うこともあると思います。そこからどんなエスカレートしていった、最終的にいじめになってしまおうと考えました。

いじめには、いろいろなパターンがあつてさいしょは悪ふざけから始まって、さいごはいやがらせや、言葉のぼう力につながってしまうこともあると思います。そしたらいじめのせいで学校に行くのがこわくなったり、その人に会

うと、何をされるんだろうと不安になってしまうこともあると思います。それがトラウマになってしまおうと思います。その気持ちを友達や家族に話したいけど言えない人もいると思います。だれかに聞いてもらおうと心がすっきりするでしょう。けれども、だれにも言えない、言いづらい人は、せいしんできにもつらくなってしまうと考えました。ここに書いたようなことがあると、いじめのない明るい学校とはぜんぜんちがうと思います。

どうしていじめが始まってしまったのかを考えました。見た目やなんとなく気に入らない、気に入らない、その人にしか分からないこともあるでしょう。例えば三人グループで遊んでいるときに、その内の二人が一ち団けつして一人をいじめるパターンもあると思います。そのほかに、心のイライラを人にぶつけてしまつていやな気持ちになる人もいると思います。わたしはふざけた行いで心がきずつく人がいると思うし、その人の心がきずついてからではおそいと思います。ほかにまだまだあるだろうと思います。

そこで、はじめはどうしたらへらせるのかを考えました。

自分がされていやな事はぜったいにしてはいけなと思います。ほかに、相手の気持ちを考えたらいじめもなるべくへらせると思うし、この行動はしてもいいかな・・・という相手を思う気持ちも大切だと思います。自分が相手に言ったことで、相手の心をきずつけてしまったなと思つたときは、あやまることも大事だなと思います。もしもクラスでいじめられている子がいたら、『こんどは自分がされてしまう』と止めることがむずかしいかもしれませんが、でも、何もしないのはよくない、ただ見ているだけだと、その見ている人もいじているのと同じだと思います。だから、ゆう気を出して、いっしょに、いじめを止めてくれる仲間を作るのがいいと思います。

一人一人が相手の気持ちを思いやるのが一番いいと感じました。そして、いじめのない明るい学校はできないと決めつけたら、本当にできないと思います。むずかしいかもしれないけどできると信じて行動することがいじめをへらせる一つの方法だとわたしは思いました。これが、い

じめのない明るい学校だと思います。

やさしさの輪

能町小学校 四年 金井 優翔

テレビのニュースを見ると、お父さんやお母さんが、自分の子どもにぼう力をふるったり殺したりする事けんがあります。ぼくは、どうして自分の子どもを死なせてしまうのか分りません。「かわいそうだな。」と思ってニュースを見えています。

最近、むすめの人工こきゅう器を外して殺してしまったというお母さんのさいばんのニュースを見ました。このニュースを見て、ぼくのお母さんが、

「お母さん一人でがんばってたんだらうね。つらかったんだらうね。」

と言いました。ぼくのお母さんはかんごしです。赤ちゃん

がたくさんいる病とうや小児科の病とうでずっと働いていました。今は、「小児の訪問かんごし」をしています。小さく産まれた赤ちゃんや病気で長く入院していた子ども、特別な医りようが必要な子どもが、家で安全に生活できるように助けること、そして、赤ちゃんだけではなく、お父さんお母さんの助けになることが、小児の訪問かんごしの役わりだそうです。

「お母さんだけが、仕事をやめてずっと子どものお世話をする。さらに、他の兄弟のお世話、料理やせんたくもお母さんの役割になってしまふ。それだとお母さんの心がつぶれちゃうでしょ？お母さんも一人の人間で、なんでもできるスーパーマンじゃないんだよ。お母さんだつてお友達と話したり、ゆつくりごはんを食べたり、仕事をしたいと思つているはずだよ。だれかが助けてあげないとな。」

と教えてもらいました。

お母さんの話を聞いて、ぼくはどうか、と家族で話してみました。ぼくには友達がたくさんいます。学校や学童、習い事、それぞれに友達や先生がたくさんいて、どこへ行つても楽しいです。お母さんに怒られることもあるけど、

学校に行くと友達と会えて元気になれます。最近、とてもうれしいことがありました。スケートボードのパークで、スケートボードがとても上手なお兄ちゃんが、

「いっしょにすべらう。ここに來たらみんないるし。ここで練習したら上手くなるよ。」

と、声をかけてくれました。そのあと、他の友達にも、ぼくと仲良くするように声をかけてくれました。自然とぼくをみんなの輪の中に入れてくれました。そんなお兄ちゃんがカッコいいなと思いました。とてもうれしかったし、その後からも友達が増えました。年れいはバラバラだけど、みんなやさしくて、いつも声をかけてくれて、パークに行くのがとても楽しみになりました。ぼくも友達にやさしくしたいと思つたし、一人でいる子には声をかけて友達になろうと思いました。

いろんな罪があるけれど、罪を犯した人はもしかしたら、ひとりぼっちでさみしい気持ちなのかなと思いました。一人でいるとき、声をかけてもらおうとうれしくなります。気持ちが明るくなります。やさしくしてもらおうと、うれしくなつて自分も他の人にやさしくしようと思います。やさしさは連さすと思います。はんざいをなくすことはむずか

しいけれど、ぼくの周りにいる人や地いきの人、これから出会う人、みんなにやさしくしようと思います。困っている人やさみしい思いをしている人には声をかけようと思います。ぼくが人にそうすることで、やさしさの輪が広がると思うからです。

社会を明るくするための取り組み

太田小学校 六年 鞍田 未優

私は、社会を明るくするための取組について考えてみました。犯罪や非行のない社会をつくるには、どうすればよいのでしょうか。

小学生の私ができることは、「悪口を言わない」「無視をしない」「いじめをしない」「暴力をふるわない」「仲間外れをしない」「けんかをしない」などがあります。

ます。さきりんどう隊の方々のおかげで、私たちは元気になるます。その姿を見て、「元気よくあいさつをすることは、とても大切なことだ」と感じました。私は地域の方々、先生方、友達等に自分から進んであいさつをしたいと思います。このように、あいさつをすることや、声をかけること等は、社会を明るくするために、誰にでもすぐにできるとだと思います。

また、私の学校では、「あいさつレベル」があり、私は常に意識しています。それは、「大きな声で」「笑顔で」「名前を言う」「目をつないで」「立ち止まって」の五つです。これらをみんなが意識することで、互いに気持ちがよくなります。最高学年として、あいさつの手本となり、学校全体がよいあいさつであふれることを目指しています。

さらに、ティックトックの動画を見て思ったことがあります。その動画では、まず、白紙に他人への悪口を言います。次に、その紙を丸めて小さくします。最後に、その紙を広げます。そのしわしわになった紙を見て、その紙のしわのように、悪口も心の中でずつと残り続けるのだと感じ

私には小学四年生の弟がいます。ずっと前に、弟とテレビゲームをしていたときのことです。弟の次に、私がゲームをすることになっていましたが、弟はなかなか交代してくれませんでした。

「代わって。」

と言っても、弟は代わってくれないので、私は、

「どうして代わってくれないの。早く代わってよ。私もしたいのに。」

と言いつ、けんかになりました。弟は、

「もうちょっと。ここをクリアしたら、代わるよ。」

と、言いました。その結果、母に怒られて二人ともゲームができなくなりました。時間を決めてゲームをすれば、二人とも楽しくゲームをすることができたと思います。思いやりやゆずりあいの心が大切だと思いました。

また、太田小学校では、さきりんどう隊の方々が登下校のとき、私たちを見守ってくれています。夏の暑い時期でも、登校時に私たちに付きそってくださいます。また、「おはようございます」と元気のよいあいさつをしてください

ました。だから、人に悪口を言ってはならないのだと思いました。

けんかをしないこと、よいあいさつをすること、悪口を言わないこと等は、気持ちさえあればすぐにできることだと思います。これからも社会の一員として、明るい社会をきずくために、自分ができることに取り組みたいです。

いじめの無い安心できる学校を作るには

博労小学校 六年 酒井 守梨

いじめとは何か、みなさんはちゃんと知っていますか。それは、誰かの心を深く傷つけ、時には命さえ奪ってしまふ、決して許されない行為と私なら答えます。ニュースでいじめの事件が報じられるたびに、胸がぎゅつと締め付けられるような気持ちになります。

「どうして止められなかったのか。」

「なぜ周りの大人や友達は気づけなかったのか。」

こうした問題が繰り返されるけれど、残念ながら、いじめは今も多くの学校で続いています。私は本気で、「いじめの無い安心できる学校」を作りたいと考えています。では、どうすればそれが可能になるのか考えてみようと思います。

まず私が考えたのは「いじめはなぜ起こるのか」ということです。私は、いじめの原因は決して単純ではないと思います。ストレス、嫉妬、不安、家庭の事情、承認欲求などの原因が複雑に絡み合っていると考えました。だからこそ「いじめをした人が悪い」で終わらせると、問題の解決にはつながりません。いじめが生まれる環境を、学校全体で変えていく必要があると思いました。

いじめをなくすための第一歩は「違いを認め合う」心を大切にするのだと思います。「みんな違って、みんないい。」は金子みすゞさんの詩のフレーズの一つです。性格、考え方、家庭環境、得意、苦手、全てが違います。でも、

分もターゲットにされるかもしれない」と思い、誰も止めない。その気持ちはよく分かります。でも、それでは何も変わりません。だからこそ、学校全体で「いじめを見たら、必ず相談する」「相談されたら、放っておかない」というルールと信頼を築くべきだと思います。私たちの気持ちに正しい意味で寄り添い、いじめを止めるという姿勢をつくることが大事だと思います。

さらにSNSなどのいじめの対策も必要です。スマホやアプリは便利ですが、個人情報が出回らない事を悪用し、悪口や仲間外れが起きやすいです。ネット上のいじめは大人が気づきにくく、被害者が孤立しやすいものです。私たち生徒一人一人が「見えない所で誰かを傷つけることの重さ」を理解し、責任をもって使い方を学ぶことが大切です。また、学校でネットに関する学習を定期的に行って、SNSの使い方を考える機会をつくるのもよいと思います。

最後に、「いじめはなくせる」と本気で信じていることが大切だと思います。いじめは「どこにでもある」「仕方ないもの」と諦める人もいます。しかし、私は、それは間違っている

一人一人が全然違う事こそが魅力です。学校には、学習発表会や運動会などの行事を通して、クラスの仲間との絆を深める機会があります。しかし、それだけでは不十分です。普段の授業や休み時間の中でも「あの子が変わっている」ではなく、「あの子は面白い」「違っていい」と思えるような空気を、意識して作っていく必要があります。

そのために、私は「対話」がとても大切だと考えます。先生と私たち、私たち同士が、もっと気軽に話し合える時間と空間をもつべきだと思います。例えば、週に一度「クラス会議」のような時間を作り、悩み事や嬉しかったことを話す場を作ることです。その時間を、ただの雑談として使わず、お互いの気持ちを理解し合うことを目的とした、心の交流を広げる場でないといけません。自分の気持ちを正直に話し、人の話を真剣に聞くことができれば、いじめを早いうちに見つけられます。

次に重要なのは「見て見ぬふりをしない勇気」を身につけることです。多くのいじめは、周りに人が見て見ぬふりをするうちに悪化してしまいます。「関わりたくない」「自

と思います。完全にゼロにすることは簡単ではないですが、「いじめをしない」「させない」「見逃さない」という意識が一人一人にあつたら、必ず変化は生まれます。私たちが、その一歩を踏み出す勇気をもてば、いじめのない学校は夢ではありません。

いじめのない学校とは、誰もが安心して過ごせる場所のことです。また、自分らしさを大切にできる場所のことだとも思います。そんな学校をつくるために、私は今日から、自分にできることを始めたいと思います。そして、まわりの人たちと一緒に、一歩ずつでもいじめがない学校に近づけていきたいです。

みんなで助け合って

福岡小学校 六年 宮崎 未 怜

私は五年生になり、登校班の班長になりました。班長は、みんなを安全に学校まで連れて行く役割です。私の姉も五年生から班長をしていました。姉は毎朝、後ろに続く私たちを気づかってくれました。その姿を見て、私も姉のような班長でありたいと思いました。

ある日、登校中に下の学年の子が雪につまずいて転び、けがをしてしまいました。班長の私は、他の班員を先に学校に連れていくよう、友達にお願いしました。そして、けがをした子とそのお兄ちゃんと一緒にその場に残りしました。その子のひざを見ると、すり傷ができ、血が流れていました。そこで、ばんそうこうを貼ろうと思い、ランドセルの中を探しましたが、残念ながらありませんでした。その子は痛みで泣き出し、歩くことができなくなってしまいました。家に戻るには遠いし学校に行くにも近い距離では

ありませんでした。周りを見渡しても私たち以外には誰もいませんでした。班長として、自分にできることを考え、精一杯やったつもりでしたが、状況は改善しませんでした。私は、この後どうすればよいかが分からず、とても困ってしまいました。今の自分にできることに限界を感じていたそのときです。

「どうしたの。」

と、ある女子中学生が声をかけてくれました。その中学生は、私たちの様子を見て状況を察すると、冷やしたタオルを持ってきてくれました。そして、けがをした子の手当てをしてくれたのです。困り果てていた私たちはとても安心しました。さらにその後、その中学生の家族も来てくださり、私たちを小学校まで送り届けてくださいました。そうして、私たちは全員無事に学校にたどりつくことができました。勇気を出して私たちに声をかけてくれた中学生は本当にすごいと思いました。

この出来事から、時には周りに助けを求めることも大切だということを学びました。自分一人では解決できないと

きやどうすればよいかわからなくなったときは、素直に周りに頼ることで、よりよい解決方法を見つけることができます。互いに協力することで、社会はより明るくなっていくのではないのでしょうか。そして私も、あの時声をかけてくれた中学生のように、困っている人を見つけたときは、温かい気持ちで進んで助けてあげられる人でありたいです。

理解してあげることが

牧野小学校 六年 釣谷 柚 稀

みなさんは、自分のことは好きですか。私は、自分のことが好きです。自分にしかない「オリジナル」の個性を愛しています。私が自分を好きになった理由は、一冊の本との出会いです。その本は、顔が傷だらけの男の子がで

ます。その本をよんだとき、最初は「自分がそんなだったら、いやだな。かわいそうだな。」と思っていました。でも、読んでいくと、「つらくても向き合っていてすごい。私もそんなふうになりたい。」と思いました。

昔の私はいつでもネガティブで、でもそれを表に出さないようにしていました。そしてそんな自分がきらいでした。「気持ちわるい」と言われたことを気にして、周りに好かれるために、だれかのことを自分のことのようにがんばっていました。そのおかげで、好かれて友達がふえたけど、いつのまにかいやなことをいやと言えないようになっていました。

でも、親友が、「いやなことは、いやとっていいよ。無理して、我まんして、それが爆発しちゃうよりいいでしょ。」と言ってくれました。いやなことを、いやというのは、最初はとても怖かったです。「だれもいなくなったらどうしよう。」と思っていただけ、親友を信じて、言ってみることにしました。たくさん友達がはなれていったのを見て、「あの人は、外側の自分が好きだったんだ。」と思い、ふっ

きました。そして、自分を変えるには、外側も内側も自分で自分を愛してあげることだと思いました。そして、その人の内側を理解してあげることが大切だと思いました。私ははじめは、理解しないことによって生まれるものだと思います。その人の内側も知って理解することがいいめをなくす一歩だと思いました。いじめがなくなれば非行や自殺が減ります。すると、犯罪も減っていくと思います。それに、親友と本が気付かせてくれました。

みなさんは、苦手な人はいますか。私にはいます。でも、前のように理解しないのではなく、理解しています。みなさんも、理解してあげることからはじめてください。そうすると、その人の内側が見えてきます。それをいつも覚えていれば、その人と仲良くなれるかもしれません。そして、どうしても無理なら、あきらめましょう。それが、おたがいの気持ちよい結果につながると思います。

そして、自分を好きになってあげてください。好きになって、理解してあげてください。そうすれば、無理はしなくなりです。自分を大切にして、好きになってあげて、最

高の人生を歩んでください。

大切なのは自分。次に周りの人や友達、という優先順位をつけておけば、楽になります。

自分の「オリジナル」を大切に、自分自身を大切に、周りの人の個性を大切に、友達の個性を大切にして理解しながら生きてください。

小さな社会から踏み出す一歩

高陵小学校 六年 小 幡 一 都

僕は今年小学校を卒業する。二年前小学校が合併し、新しい校歌ができた。その一節に「人は一人では生きていけない」「人は一人では何もできない」とある。これ以外にも、「元気を分け合う」、「手を取り合う」、「涙を拭い合う」などの歌詞がある。これらは、社会を明るくするために大切

なことだと思う。

母は「家庭は一番身近で一番小さな社会。家でしていることは外で出るよ。」とよく言っている。社会には人種差別やいじめ、障害のある人への偏見、戦争などのさまざまな問題がある。

僕には二つ下の妹と四つ下の弟がいて、毎日のように喧嘩してしまう。「うるせえ」「黙れ」「死ね」「ごみ」「かす」「脳なし」などの汚い言葉を妹や弟や母に浴びせて、不快な気持ちにさせてしまっている。その時は自分自身がヒートアップしており、相手の気持ちを考えられなくなっている。次第に熱も冷めてくると、冷静に考えられるようになり、使っていた言葉がいかにもひどい言葉だったかに気づく。相手が涙する理由もわかる。だけど謝れない。その理由は自分が落ちついていても相手が怒っていると思い、素直になることができないからだ。だけど、勇気を出して謝ると相手が怒っているかもしれないが、自分は気持ちが落ちつく。気持ちは落ちつくが、後悔は残る。毎日のように繰り返してしまうが、母は毎日身の回りのことをしてくれる。

妹や弟は僕のことを頼ってくれる。そんな時に「人は一人では生きてはいけない」「人は一人では何もできない」ということをとても実感する。そして僕に今のままだとよくないと教え、力をくれる。周りの人を傷つけ、自分も後悔する言動は繰り返してはいけない。この作文を書きながら、僕は日々の言動を反省した。そして、周りの人の温かい支えに気がついた。これからは、周りの人を傷つけるのではなく、「元気を分け合う」にはどうしたらよいか、「手を取り合う」とはどういうことかなと考え、言動に気をつけていきたい。

まず、家庭という小さな社会で言動を改めることが、人種差別やいじめ、障害のある人への偏見、戦争などの問題を踏み止めさせてくれるのではないか。そして、「涙を拭い合う」は、母や妹、弟を傷つけ流す涙のことではなく、喜びなどの嬉し涙に共感している様子だと思う。僕が陸上の県大会で入賞した時の母の涙は、汚い言葉で傷つけ泣かせてしまった涙とは少し違っていた。その時の母の涙は、市大会の時から約一ヶ月支えてくれた感謝の気持ちが湧き

助け合いの一步

福岡中学校 一年 吹留 誉花

上がり、見ていると温かい気持ちになった。母は「家庭は一番身近で一番小さな社会」とよく言っているが、この小さな当たり前にあると考えてしまっている社会との共生が、実は一番難しいと思う。「これぐらい言っても許される」「ありがたうと言わなくても伝わるだろう」「ごめんと言わなくても伝わるだろう」という甘えが出てしまうからだ。しかし、どんなことがあっても支えてくれる家族の存在は、僕にとっても大切な存在だ。家庭という一番身近で一番小さな社会で、これからも自分磨きを行い、春から中学生になるステップにしたい。

みなさんは、目の前の人が困っていたらどうしますか？
勇気を出して助けますか？見て見ぬふりをしますか？
私は困っている人が知らない人でも手を貸すことが大切だと思います。

これは私が小学六年生の時の体験です。私が母と一緒にドラッグストアに買い物に出かけた時、買い物が終わって、母が買い物かごとカートを片付けていました。すると、「ドサドサッ。」と、物が落ちる音がしたのです。振り返ってみると、おばあさんが持っていた買い物袋から買ったものが落ちて、困っている様子でした。私はどうすればよいかわからず、立ち止まっていました。周りの人も、何事もなかったかのように通り過ぎて行きました。おばあさんを助ける人はいなかったのです。そこに、母が戻ってきて、「おばあさんの荷物、拾ってあげて。」

と、小さな声で言いました。母は手に荷物を持っていたので、私がやるしかないと思い勇気を出して、おばあさんの荷物を拾いました。全て袋に入れた後、おばあさんから、「ありがたうね。」

母は、行き交う車がたくさんあったのに、立ち止まり声をかけることがなかったのはどうしてなのかと、心が痛くなったと話してくれました。また、祖母が車を止めておばあさんの話を聞きまじようと背中を押してくれたおかげで、おばあさんに声をかけることができたとも話してくれました。私はその場にはいませんでしたが、母の話を聞いて温かい気持ちになりました。

私は、この経験から、困っている人がいたら、自分から手を差し伸べられる人になりたいと思いました。誰かに言われてからではなく、自分の意思で困っている人を助け、それが周りの人にも広がって、みんなが助け合える街になったらいいと思います。

皆さんも、困っている人を見かけたら、手を差し伸べてあげてください。きっと、その勇気は誰かの心や社会を明るくする一歩になると思います。

と、感謝されて、嬉しい気持ちになりました。このようなことが母にもあったそうです。以前、母と祖母が車で出かけたときに、車道をおばあさんが歩いていたそうです。その日は雪が降り積もる寒い日でした。コートも着ずに、しかも普通の靴を履いている様子を見て、母と祖母は、「お年寄りが寒い日に、薄着で傘もささずに、しかも靴も雪道を歩くものではない靴で歩いている。どうしたのだろう。」と思いをかけました。おばあさんに話を聞くと、病院で診察してもらい帰ってきたけれど、忘れ物をしたことに気づき、またバスで病院まで行ったところまではよかったが、帰りのバスがなかったそうです。それで歩いて帰ってきたとのことでした。その話を聞いて、母と祖母は家までおばあさんを送っていくことにしたそうです。無事に帰ってきたおばあさんを見て家の方は、深く感謝されたそうです。

言葉の重みに気付いた日

高岡西部中学校 一年 福田 昊 隼

言葉は大切な役割をになっていると思います。それは、言葉一つで相手の心を傷つけてしまったり、自分の心が傷つけられたりするからです。言葉の重みを考えずに適当に言葉を発していた過去の僕が、少し意識をして発言できるようになり、今の僕に変わったきっかけがあります。

僕は最近まで言葉の重みや使い方をあまり意識していませんでした。学校の友達の容姿についてからかっていました。からかうと、クラスのノリについていくことができると、本人は嫌がっていないようなそぶりだったので大丈夫だろうと軽く捉えていました。しかし、実際には本人は嫌だったということが分かり、後に注意されました。その時僕は、相手を傷つけてしまい本当に申し訳ないと思いました。彼の捉え方と自分の捉え方が異なることに初めて気付いたのです。

一方で、自分の言葉が役に立ったこともありました。僕は野球をしていてライトという外野のポジションを守っています。ライトは一塁ベースと二塁ベースの奥にあるポジションで、内野ゴロの送球カバーに行くことがあります。内野ゴロの送球を受け取るファーストというポジションのチームメイトが、試合前に緊張していました。そこで僕は、

「エラーしてもカバーするから思い切ってプレーしていいからね！」

と声をかけました。その後、ファーストを守るチームメイトは笑顔で安心したようにうなずいてくれました。それが対面の良さで、相手の表情や口調を見て適切に声をかけることができる所だと思います。そして、対面の時にしかない言葉の良さもあると思います。それは、表情や口調が見えることで特定の共通した感情を得られることです。共通した感情を得ることで、共感したり反対したりできるからです。同じ「はい」でも、うれしそうで「元気に言う」「はい！」と悲しそうにうつむいて言う「はい…」では大きく違いま

そして、一学期の終業式に

「SNSでは相手の声や表情が見えないため、気持ちを読みとるのは難しいです。そのためSNSを使ってやりとりを行う際には、言葉から伝わる意味をしつかりと考えて下さい。」

と教わりました。

自分が思っていることを言葉で伝えるのは難しいと思います。なぜなら、感情のように言葉では伝えきれないものがあるからです。学校で会い、対面で話す場合は、相手の表情や口調などから意味を明確に理解する事ができます。しかし、SNSは違います。言葉のやりとりはできるものの、気持ちを表情や口調で表すことはできません。スタンプや絵文字などで多少は表現できるものの、的確に読みとってもらうのはやはり難しいと思います。

今ふり返ってみると、僕は思ったことを口に出し多くの人の心を傷つけ、個性を否定したこともありました。十人十色、十人いるなら十人の個性や特徴がある、そう考えて誰の意見も認められるようにになりたいです。

す。

言葉の使い方は難しく、重みもあります。僕もふくめて多くの人は、重みを分かっているのにふざけて言ったり、何気ない一言で心を傷つけたりしてしまう事はよくあると思います。これ以上、誰かの心が傷つくことがないようにするために、言葉から伝わる意味や重みをしっかりと考えることが大切だと感じました。また、その言葉を伝える際には相手との言葉の受け取り方の違いを意識することが大切です。さらに、自分の個性や相手の個性を大事にして、心が傷つく人を一人でも減らせるようにしたいです。そして、いじめのない明るい学校や社会へと変えるために、まず僕が率先して言葉の使い方を改めようと思います。

祖父と少年

高陵中学校 一年 小倉 一 晃

「僕はシンナーや麻薬で少年刑務所に入っていました。」
何気なく祖父と一緒に見ていたテレビで、大学生が麻薬で逮捕されたとのニュースが流れると祖父は、かつて保護司をしていた際に担当していた少年と面接したときの話をしてくれた。

「保護司？なんだそれ？」

僕はそのとき、保護司という言葉初めて耳にした。調べてみると、犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支えるボランティアという意味だとわかった。

祖父が担当した少年は、何回も違法な麻薬を使って再犯を繰り返し、関西で一番厳しい少年刑務所に入っていたそうだ。僕が、保護司をしていてやりがいがあったのか尋ねると、祖父は、

「保護司をしていたときは必死だったから、正直わからへ

当時は僕の母も同居していたので、犯罪者に家の間取りを知られないように仕切りをして家族と接触しないように調整するのが大変だったと話している。結局、少年は中学校も中退して麻薬の再犯で捕まったため、祖父は、
「最後まで少年を救うことができなかったのが心残りや」と残念そうに小さな声で話していた。祖父は少年を救えなかったと話しているが、僕は、祖父はそのときにやれることをしっかりとやっていたのではないかと考える。祖父は正面から少年に向き合っていたけれど、たまたまその少年の心の鍵穴に合う鍵がなかっただけではないかと思う。少年が成長して当時のことを思い出した時には、祖父が少年に対して手を差しのべた行為はわずかでもプラスになったのではないだろうか。

ニュースでは大学生が麻薬を持っていたと報じられていたので、個人だけではなく家族ぐるみで麻薬の恐ろしさを知り、自分の周りの友達にも身近な危険が及ぶ可能性もあるという認識を持つ必要があると思う。少年のように、小さい時から親自体が犯罪に手を染めていれば、その家族

ん。面談しようにも約束を守らなかなか会えへんかった。例えば少年補導員なら、周りから理解されるから、やりがいはあると思う。保護司の仕事は、更生を手伝って敗者復活の手助けができる尊い仕事やけど、人目には付かない孤立した陰の仕事で、とにかく難しかった。結局、自分が担当していた少年は、観察期間中に麻薬の再犯で捕まったから、それっきりやった。」

と話してくれ、自分の知らないところでこんな大変な仕事をやっていたんだなあと痛感した。祖父が担当した少年は、親も麻薬を使って捕まっていたようで、そのような環境で育ったため少年も、ある意味で被害者と言えるのかなと感じた。

麻薬について調べてみると、依存性が強く、乱用してしまうと妄想や幻覚が見え、いろいろな犯罪や交通事故を引き起こす原因になり得ることがわかった。麻薬に手を染めないためには、その危険性や依存性をしっかりと学び、他の犯罪につながる可能性があることを知っておく必要がある。祖父は、担当した少年と自宅で面接していたように、

や子供も親の背中を見て同じようなことをするかもしれない。

自分の身の周りで、何か不安や辛そうな顔をしている人がいれば、まず話を聞いて、もし悪いことに巻き込まれていれば、みんなで地域ぐるみで犯罪や非行のない地域社会づくりをしていくことが大切であると思う。

矢印を自分に向けたことで見えた世界

五位中学校 三年 中 保 潤 哉

私が所属しているサッカークラブのコーチが、練習終わりのミーティングのたびに私たちに言っている言葉がある。

それは、「常に矢印は自分に。相手に矢印を向けずに、自分に矢印を向けて考える。」というものだ。最初は、何のこ

とを言っているのかよく分からなかった。そのときはただ、「人を責めるな」という意味なのかなと思っていた。

しかしある日、練習中にミスをした仲間に対して、私は強い言葉をぶつけてしまった。「ちゃんと周りを見ろよ。」と。イライラしていた私は、その子のせいでチームの流れが悪くなったと思い込んでいた。

でも、その日の練習終わりのミーティングでコーチが言った。「他人のミスばかりを責めるのではなく、自分が今どうすればよいかを考えて、明日から練習に取り組むように。」と。

その言葉を聞いて、私はようやく「矢印を自分に向ける」という意味がわかった気がした。

確かに私は、その子を責めることで、自分から目をそらしていた。もし自分をもっと声をかけていたら、チームの雰囲気を変える行動をしていたら、自分にもできたことがあったはずだと気づいた。

その日を境に、私は少しずつ変わろうとした。誰かのせいにする前に、「自分にできることはなかったか。」と考える

を自分に向けて考えること。

そうした考え方が、誰もがやり直せる明るい社会をつくる第一歩となっていくとよいなと私は思う。

「矢印を自分に向けること」これは、私の考え方をえてくれた言葉だ。

これからも私は、この言葉を胸にどんなときも自分を見つめ直す姿勢を忘れずにいたいと思う。

声をかけ合うことで見えてくるもの

志貴野中学校 三年 武田 穂乃華

最近、ニュースやネットで、さまざまな事件やトラブルの話題をよく見かけるようになりました。その中には、私たちと同じ年代の中高生が関わっていることもあり少し怖いと感じることもあります。どうしてこんなことが起

るようになった。すると、以前は試合中にロングボールやパスなどが通らなかったとき、「なんであれが取れないんだよ。」と思っていた場面でも、今は「自分のボールがあまりよくなかったのかもしれない。」と反省するようになった。

不思議なことに、相手を責めていたときよりも気持ちが悪くなるのを感じた。そして、自分を見つめて変わろうとすることは、確かに前に進んでいる感覚を与えてくれた。

この考え方は、サッカーだけでなく、学校生活や友人関係の中でも役立つようになった。

社会の中には、いろいろな立場や価値観の人がいて、時には、間違いを犯してしまう人もいる。

でも、そんなときこそ私たちは「どうしてそんなことをしたのか。」と責めるのではなく、「自分たちに何ができただろう。」と考え直す必要があると思う。

非行に走る若者や、社会復帰を目指す人たちに対して、「どうせまたあいつは失敗するだろう。」と矢印を相手に向けるのではなく、「自分にできる支えはないか。」と矢印

きしてしまうのかと考えたとき、「人と人との関わりが減ってきているからかもしれない」と思いました。だからこそ今、地域や学校の中で、もっと人と人とのつながれる社会をつくるのが大切なのではないかと考えました。

「社会を明るくする運動」は、犯罪や非行を防ぎながら、誰もが安心して暮らせる社会をつくっていくための活動です。特別なことをしなくても、小さな行動の積み重ねが、明るい社会につながっていくという考えに、私はとても共感しました。中でも、私が大切だと思うのは「あいさつ」です。

あいさつは、毎日の生活の中にある当たり前のことです。しかし、ただ言うだけではなく、心をこめて交わすあいさつには、大きな力があると思います。たとえば、朝「おはよう」と声をかけられたとき、相手の笑顔があると、自分も自然と笑顔になれます。私も実際に、朝気分が悪くて学校に行きたくないと思いがら向かったとき、友達が元氣よく笑顔で「おはよう」と声をかけてくれて心が救われました。そんな一言で、少し元氣になれたり、安心した気持ち

ポスターの部



ちになれたりすることもあります。あいさつは、ささやかな言葉かもしれませんが、人と人との心を近づけるきっかけになるのだと思います。

地域の中でも、あいさつは大事な役割をもっています。たとえば、登下校のときにすれ違う大人の方たちにあいさつをする、「この子は地域の中の一員なんだ」と思ってもらえますし、大人の方たちも子どもたちのことを自然に見守ってくださるようになります。そのように地域の人たちがお互いに声をかけ合う関係ができれば、不審なことや困ったことにもすぐ気づいて、安全な町づくりにつながります。

また、あいさつは相手への思いやりの表れでもあります。言葉にするのは簡単ですが、それを毎日続けるのは意外と難しいことです。しかし、「誰かがしっかりと見てくれている」と思えることで、寂しさや孤独を感じる人が少なくなるのではないかと思います。非行やトラブルも、そのような気持ちから始まることが多いと聞きます。だからこそ、普段からお互いに声をかけ合っていくことが、非行を防ぐ

ことにもつながるのではないのでしょうか。

学校でも、みんなが明るくあいさつをすることで、教室の雰囲気がよくなり、話しかけやすくなったり、困っている子にも自然と目が向くようになったりします。何か大きなことをしようと思わなくても、あいさつの積み重ねが、相手を思いやる気持ちや、周りを見る力を育ててくれると思います。

「社会を明るくする運動」は、特別な人だけがする活動ではなく、私たち一人ひとりのほんの少しの行動の中にあるのだと思います。私もこれからは、ただの言葉としてではなく、きちんと心を込めてあいさつをしたいです。そして、周りの人が少しでも明るい気持ちになれるような行動をしていきたいと思っています。

〈最優秀賞〉

【優しさは、人を少し強くする】

南条小学校6年

吉田 悠真



【一人じゃないよ

みんないるから大丈夫】

戸出中学校1年

桶川 夏希

小学生作品

【十人十色 偏見のない世の中へ!!】



野村小学校6年
川 除 獅 恩

【守ろう 相手を想う明るい心】



南条小学校6年
寺 井 惟 叶

【明るい社会をつなごう!!】



南条小学校4年
春 多 彩 葉

<優秀賞>

【ひとりじゃない つながるころ】



野村小学校6年
中 村 蒼 真

【やさしい心は みんなのえがお】



能町小学校4年
四 津 川 莉 唯

【えがおのわ】



南条小学校1年
磯 辺 咲 歩

【一歩ずつ明るい未来へ】



野村小学校6年
浅 島 沙 耶

編集後記

第七十五回「社会を明るくする運動」高岡市推進委員会では、今年も高岡市内小・中・特別支援学校・義務教育学校の児童・生徒に作文・ポスターコンテストの作品募集を呼びかけました。

作文の部においては、小学校九校から百九十八点、中学校七校から二百五十九点昨年度からほぼ倍増です。集まりました。その中から、最優秀賞を四点、優秀賞を十二点、入賞作文として選びました。

入賞作文は、日常の家庭生活や学校生活で体験したことなどを基に、「社会を明るくする」ために自分はどうのように取り組んでいくかを強く訴えていました。特に地域の方たちや学校の先生・友達、そして家族とのつながりを通して感じたこと・考えたことを素直に書き表しています。その純粋さ、瑞々しさに共感し感心せざるを得ません。心から感動する作品がいくつもありました。

ポスターの部の出品数は、小学校八校から百五十点、中学校は四校から二十七点でした。その中で、最優秀賞を二点、優秀賞を十一点、選出しました。

入賞ポスターは、どの作品も心を込めて丁寧に描いてありました。創造性、独創性に富み、個性的な表現に仕上がっていました。それぞれの作品には社明運動に関する題名が付けられ、主題が明確に伝わるような工夫が見られました。

最後になりますが、猛暑が続いた今年の夏に根気強く取り組み、作品を仕上げた児童・生徒の皆さんの頑張りに頭が下がります。ありがとうございます。また、熱心にご指導くださった各校の先生方に厚く感謝を申し上げます。多くの方々がこの作品集に目を通していただくことで、作品を作り上げた児童・生徒の励みや喜びが大きくなると思います。高岡市保護司会は、この作品集が、明るい社会の実現に向けての一助になることを心から願っています。

令和七年十二月

社会を明るくする運動高岡市推進委員会

高岡市保護司会

地域活動部会

部長

正平

務

中学生作品

【その一声 あなたの勇気が誰かを救う】



志貴野中学校3年
小川千穂

【心つないで 明るい社会】



志貴野中学校1年
松嶋天音

【立ち止まり 共に考える明るい社会】



戸出中学校1年
中川紗那

【社会につながる 小さな優しさ】



志貴野中学校1年
田畑瑠衣

第七十五回(令和七年度)

『社会を明るくする運動』

作文・ポスターコンテスト

高岡市小・中学校児童生徒入賞作品集

令和七年十二月十六日 発行

編集 社会を明るくする運動高岡市推進委員会

〒933-0057 高岡市広小路七-五〇

高岡市役所 福祉保健部 社会福祉課内

電話〇七六(二〇)二六六七